天地自然に関する部首

日は、太陽の象形です。天候を左右し、昔から時刻の基準とされたので、気象、時間に関係する文字の部首となっています。音は、漢音がジツ、呉音がニチ。

旦は、地平線に太陽が現われた形で、“あさ”を表わした字です。今では、「元旦」以外にあまり使われないようですが、もっと使われてよい字だと思います。旦夕（朝夕）。

早は、旦と全く同じ着想の字で、“朝はやい”の意味を表わしています。十は艹の略形でソウの音を表わしています。この“はやい”は時期的な早さのことで、その反対は「晩」です。「早春」「晩春」。速さは、「速い」「遅い」と使います。

晩は、“のがれる”意味の免（ベン）と日との会意形声字です。日がのがれ去る、とは“日が沈む”ことで、「早」に対する言葉です。“おそい”が本義の字です。時期的には“夕ぐれ”を言います。晩鐘、晩餐、晩年。

旬は、包（人の勹の項参照）の勹と日との会意字で、“十日を一包みにする”という意味の字です。昔は、十干十二支で日を表わしました。十干は十日で一巡しますので、十日を「巡」と言い、字形を旬で表わしたのです。

昇は、上（しょう）の意味の升（ショウ）と日との会意形声字で、“日が上る”こと。昇天、昇進、昇降。

易は、 で、とかげの象形。日の光を受けて色が変わるので、“かわる”という意味に使われます。貿易、交易。“とかげ”は虫を加えて「蜴」。

星は、古体は で、星の象形と生（セイ）の形声字。今の形からは、“太陽から生まれた惑星”と考えることもできます。

映は、英（エイ）の省略された央と日との会意形声字で、“日の光に照りはえて物の姿が美しく見える”という意味の字です。“映（は）える”“うつる”。

昨は、阻と同音の乍（ソ）と日との形声字で、“一日へだてた日”を表わしています。音は乍（サク）です。転じて、「昨年」というように使います。

是は、正の変形した疋と日との会意形声字です。“太陽の巡行のように正しい”という意味の字で、“正しい”という意味を表わしています。是認、是非、是正。

昼は、晝が本字。晝（ ）と日の会意字と見ることができます。は、

太陽の出ている時を画したもので、“ひる”を意味します。

普は、並(ヘイ)と日との会意形声字。“日が何日も並ぶ”という意味で、“平生“普段”という意味を表わした字です。「普通」(並み)。音は並(ヘイ)がつまってフ。

景は、日と京(ケイ)との会意形声字。京は亼で、丘の上に高くそびえる宮殿の象形字です。太陽をそれになぞらえて、“高い空に輝く太陽”というようにたたえたのが景の字です。“太陽”が本義で、“陽光”、転じて、“ありさま”の意味に使われます。光景、景色。

暁は、“高い”意味の堯(ギョウ)と日との会意形声字で、“日の高く上る”夜明けの意味を表わした字です。“あかつき”。

暇は、“借りる”意味の叚(カ)と日との会意形声字で、“日を借りる”という意味の字です。「休暇」とは、公事をすべきだが、借りて私事に使わせてもらう、という気持の言葉です。

暖は、緩(ゆるやか)の意味の爰と日との会意形声字。“おだやかな日”の意味で、“あたたかい”ことを表わしました。

緩は、爰(カン)と糸との会意形声字です。爰は、爪(手)と于と文(手)の会意字で、両方から物を引っ張って伸ばす意味の部首。“糸をゆるめる”のが本義です。

暫は、“日を斬(き)る”という意味の会意形声字。日数が少なくなるので、“わずかの期間”つまり“しばらく”という意味になります。暫時(ザンジ)、暫定。

月

月は、半月の象形です。まん丸い時もありますが、欠けている時の方が多い。太陽に比べてそこが特徴です。音は欠(ケツ)という意味です。

朗は、“良い月”という意味の会意形声字です。音は良(リョウ)。晴れた空に満月で、“あきらか”“ほがらか”の意味に用います。朗月、明朗、朗読。

期は、其(キ)(箕(ミ)の本字)と月との会意形声字。箕は米や麦をふるって良い物を“選別する”道具です。昔は、庶民はこよみを持たないので月の欠け具合で、日を知りました。月は日(ひにち)日を意味します。期は、“会う日(ひにち)日を選定する”ことを表わした字です。“約束の日”“日を決めて会う”“約束する”“決心する”などの意味に用いられます。期日、期待。

望は、 、、望と変化してきています。王は、呈の王で、 。は、番兵が目を見張って遠くを“のぞむ”意味の字。望は、“月を望む”意味の字で、“満月”の意味も生まれました。望は、臣(目の臣の項参

照）の代りに音を表わす亡（ボウ）を入れたものです。“のぞむ”が本義で、“満月”は転義。希望、望月（もちづき）。

有は、ナ（手）と肉月の会意形声字で、音は又（ユウ）です。右手に肉を持つ形で、“もつ”が本義。所有者。転じて“ある”。有徳者。

服は、令の卩（第２章参照）と文と舟月の会意字。“天子の卩を手にして任地へ向かう”ことを表わした字です。「明従」が本義の字です。「南船北馬」と言って、舟は交通機関の最も重要なものでした。「服務」から転じて「服用」「服装」の用法が生まれました。

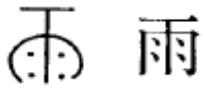
朝は、草と舟月との形声字で、草の間に太陽が見える“あさ”を表わした字です。音は舟（シュウ）が変化してチョウ。今の字形からは、“月が沈んで、代って日が上る”意味に取れます。

夕は、半月が山から半分のぞいている形の字です。“夕ぐれ”を表わした字です。夜の初めです。音は寂（セキ）（しずか）。

外は、亀卜の卜と欠ける意味の夕との会意字です。“亀卜の割れ目（欠）”は“そと”に表われるので、“そと”の意味を表わしたものです。（貝の項参照）。音は割（ガイ）。

多は、夕べを重ねる意味の会意字です。“おおい”こと。

夢は、瞢（ボウ）と夕との会意形声字。漢音はボウ。呉音はム。目は、目が覆われて全く見えない意味、罒は、ぼんやり見える意味。事実は目で見ないのだが、ぼんやりと見ているような感じの“ゆめ”をよく表わしている字です。



雨は、空から垂れ下がった雲間から水滴の落ちる形を象った象形字です。音は宇（ウ）（そら）です。国語の“あめ”が天であるのと同じです。

雲は、“くも”の象形の云（ウン）に雨を加えた会意形声字です。“雨ぐも”が本義。

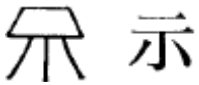
需は、あごに垂れた鬚（ひげ）の象形である而と雨との会意形声字。“雨だれ”が本義。転じて“ぬれる”意味がある（襦を参照）。“もとめる”の意味は、同音の須（シュ）（鬚の本字であり、而とも同音同義）の仮借です。需要、必需。

霊は、靈が本字です。巫（みこ）が神霊を呼び降して、雨乞いの祈祷を唱える、という意味の字で、“神のみたま”を表わした字。音は零（レイ）（令を参照）。

露は、雨でないが、雨粒のように路上に置かれる“つゆ”のことです。音は路(ロ)。

霜は、雨と相の形声字。相は氷(ひょう)の意味。少(ショウ)が秒(ビョウ)、眇(ビョウ)と変化したのと同じ例。“雨のこおったもの”の意味で、“しも”を表わしました。

霧は、雨と務(ム)の形声字。務は無(ム)の意味で、有るようで無く、無いようで有る“きり”を表わしたと思われます。「雷、電、震」は、第２章の辰の項。



示は、祭段の机の象形で、犠牲を載せて神に供えるので、“神”の意味の部首として用いられます。音は載(サイ)(si)の意味のシ。

「神」「社」は第２章、辰の項。

礼は、神前にひざまずき、「拝礼」している形の字です。後、音を表わす豊(レイ)との形声字、禮が作られましたが、今はまた古い形にもどりました。

祈は、ネと斤の形声字。斤の音は幾、覬、希で、“のぞむ”こと。神に“いのる”ことです。

祉は、ネと止の会意形声字。“神の恵みがわが身に止まる”という意味の字で、“さいわい”。「福祉」。

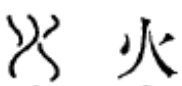
祝は、神官が神に祈りを告げる意味の兄とネとの会意字。“神官”“祝詞”(のりと)“いわう”などの意味に使われます。

祥は、ネと羊との形声字。羊(ヨウ)の音は変化して詳(ショウ)。羊を犠牲として神前に供え、“さち”を受けること。さいわい。吉祥(キッショウ)。瑞祥(ズイショウ)。

禍は、過失の意味の咼(カ)とネとの会意形声字で、“人間の過失に対して神の下す罰”という意味の字です。“神のとがめ”“わざわい”。

祭は、肉の意味の と又(手)と示との会意形声字です。“肉を神前に捧げて、“まつる”ことを表わしています。音は示(サイ)(si)。

禁は、林と示との形声字。音は林(リン)が変化してキン。この音は忌(キ)を表わしています。“神”を祭る時の“いみごと”が本義で、“避ける”“やめる”という意味に使います。



火は、火の燃えている形を表わしたもので、脚となったときには「灬」となります。

灰は、灰が本字。手の意味の と火との会意字で、上から手でおさえられることを表わした字です。火の燃え尽きて“はい”となった状態を表わしています。

災は、わざわいの意味を表わす巛の略字の巛(サイ)と火との会意形声字で、“火のわざわい”という意味の字。巛は、川の流れのふさがった形で、“犯濫のわざわい”を表わした部首です。音は塞(サイ)(ふさがる)です。

炉は、爐の新字体です。家(戸)の中で火を燃やす所という意味の会意字です。音は盧(ロ)。

炭は、山の崖の意味の厂(カン)と火との会意形声字です。“すみ”は、山の中腹で、焼いて作ることを表わしています。

烈は、はげしい意味の列(レツ)と灬との会意形声字で、“火勢のはげしい”という意味の字です。烈火。転じて烈日。烈風。

焦は、“鳥(隹)を焼く”という意味の会意字です。“こげる”意味に使いますが、音は焼(ショウ)です。

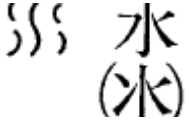
煩は、頭の意味の頁と火との会意字で、“わずらわしい”ことがあって“頭がかっかとする”という意味の字です。音は、繁雑の「繁(ハン)」です。煩雑(繁雑)。

焼は、燒が本字。堯(目の暁を参照)と火との会意形声字。“火が高く燃え上がる”こと。“やく”こと。音は堯(ギョウ)がなまってショウ。

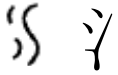
熱は、勢の意味の執と灬との会意字。火が勢いよく燃える、という意味の字で、“あつい”ことを表わしています。

燈は、高きに登る意味の登(トウ)と火との会意形声字。高い所から照らすための“ともし火”のことです。

爆は、“はげしい”意味の暴(ボウ)と火の会意形声字。“はげしく燃える”という意味の字です。音は、慣用音でバク。爆発、爆破。「火薬」の意味に多く使われています。



水は、川の水の流れる形を表わしたものです。扁の氵は、その省略した形です。脚の場合は氷となります。音はスイ。



永は、 で、川の分流する所を表わした字。支流を持った“長流”の意味の字で、“ながい”という意味を表わしました(脈の項参照)。

汁は、氵と十(ジュウ)との形声字。ジュースも汁の仲間でしょう。胆汁、果汁、果汁。

汽は、蒸気の立ち上る象形の (気(キ))と氵との会意字で、“水蒸気”のこと。

決は、缺ける意味の夬(ケツ)と氵との会意形声字です。下流の氾濫を軽減させるために、“上流の堤を切る（決壊”ことです。これは大変に判断のむずかしいことなので、「決心」「決断」を必要とするのです。

沈は、人が家にこもって“しずんでいる”意味の冗(チン)（冗）と氵との会意形声字で、“水にしずむ”こと。頭の下に沈む木が「枕」です。

油は、由(ユウ)という川の名です。この流れはとろりとして、波一つ立たないので、“とろりとした液体”“あぶら”を表わすようになりました。

沸は、フツフツとわき立つ音を表わす弗と氵との形声字。沸騰、煮沸。

治は、台(ti)と氵との形声字。台(チ)は致(チ)で、“ほどよく”し“整える”意味。中国では洪水が多く「治水」が国を“おさめる”ことでした。

法は、水の低きについて流れ去るように、無理のない“正しい生活のよりどころ”を表わした字と考えてよいでしょう。本字は灋で、廌と氵と去との会意形声字です。廌は君生の刑罰が正しく行なわれている時に、朝廷に生まれると言われる神獣です。この神獣と水の自然の理法に適った姿とで、“おきて”のあるべき姿を表わしています。音は去(キョ)が変化してホウになりました。

波は、表面の意味の皮と氵との会意形声字で、“水面に生ずるなみ”を表わしています。音は皮(ヒ)が変化してハ。

泳は、“永中に永くいる”という意味の会意形声字です。音は永(エイ)。“およぐ”ことです。

泣は、人の立っている形の立と氵との会意形声字。目から水を出すのは“なく”ことです。音は立(リュウ)が変化してキュウ。

温は、溫が本字。囚人に食べ物を与えることで、心のあたたかいことを表わす盈と氵との会意形声字。“あたたかい水”“水をあたためる”が本義。

渡は、“はかる”意味の度と氵との会意形声字です。水の深さをよくはかってから“わたる”のです。

渉は、水中を歩いて“わたる”という意味の字です。渡渉(トショウ)。

測は、きまりの意味の則(ソク)と氵との会意形声字です。長さのきまりである物指しで、水の深さを“はかる”ことです。測定、測量。

源は、原が本字です。厂(がけ)と泉(いずみ)との会意形声字で、水の湧き出る“水源”が本義の字です。転じて、崖の上の平らな所を「原」というようになったので、氵を加えて「源」を作りました。高くて平らな所は原（高

原)、低くて平らな所は野(平野)です。「原野(ゲンヤ)」(野原(のはら))は両者を含めて言ったものです。

冫は、氷に見える“すじめ”の形で、“こおり”の意味を表したものです。“氷”が本義で、“寒い”意味にも用いられます。

冰は、冫(ヒョウ)と水との会意形声字。“水がこおる”という意味の字で、“氷”の本字。

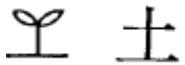
氷は、冰の略字。水と丶の指事字で、水の固まったことを示したものです。

凍は、冫と東との形声字で、“こおる”という意味の字。音の東は冬(トウ)。凍死、凍結。

凝は、冫と疑(ギ)との形声字で、氷の“かたまる”意味を表わした字です。音は疑(ギ)がのびてギョウ。凝固。凝結、凝視(じっと見つめる)。

冬は、古い形は 。 は、家の周囲を閉じた形で、氷と合わせて“さむい冬”を表わしています。音は終(シュウ)がなまってトウ。

寒は、古い形は 。家の中を枯草で囲い、その中に人がいる形に氷を加えて、“さむい”という意味を表わしたものです。



土は、草木の芽が地上に出始めた形を象ったもので、“つち”を表わしています。音は地上に物を吐き出す意味の吐(ト)。

在は、 で、才(サイ)と土との会意形声字。才は、草木の芽がわずかに地上に出た形で、“わずかだが確かにある”という意味を表わしています。音は才(サイ)。

地は、“へび”の本字の也と土との会意形声字。へびのようにうねっている大地、という意味の字です。音は蛇(ジャ)が短かく発音されてジ。

池は、城壁の周囲を蛇のようにとり巻いている川のことです。「他」は“蛇のようないやな人”が本義で、“あいつ”という意味の字です。転じて“よその人”。

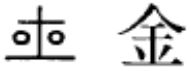
坪は、家を建てるために“平らにならした土地”という意味の字で、転じて、土地や建物の広さを表わす単位になりました。音は平(ヘイ)。

城は、土を盛り上げて作った「城壁」が本義の会意形声字です。音は成(漢音はセイ、呉音はジョウ)。傾城(ケイセイ)、落城。

堀は、掘(クツ)と土との会意形声字。掘は、体を屈曲させて手を使う、という意味の会意形声字で、“ほる”ことを表わした字。土を振り起こして作

った溝が堀です。

境は、竟(キョウ)と土との会意形声字。竟は、章と儿（人）の会意形声字。章は、基本数の最後である十と音とで、“音楽が完結する”ことを表わした字です。楽章。人が音楽を“奏し終える”のが竟の本義。“終り”という意味を表わします。畢竟(ヒッキョウ)（とどのつまり）。“土地の終わる所”が境です。鏡は、実体と映像との境(さかい)の金属という意味です。



金は、土の間に混入している金属の塊を表わす土と今(キン)との形声字で、“金属”の意味を表わした字です。

針は、十が本字。十は針に糸を通した象形です。十(シン)の音が数字の十（八十寺(ハッシンジ)の例で分かるように十は十(シン)と読む）と同じだったので、この字は専ら数字として使われ、そのため金を加えて作った字です。

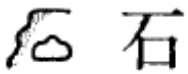
釘は、丁が本字。丁が釘の象形です。針と同じように、本字が別の意味に仮借として用いられたために、金を加えました。

鉱は、金と広(コウ)との会意形声字。鉱石を掘り出す坑内の広くがらんとしていることから、“坑内”を鉱と言ったものです。“鉱山”が本義に近い用法です。今は鉱山から掘り出された“金属を含んだ石”の意味になりました。

錯は、借りる意味の昔と金との形声字。一つの金属の上に、他の金属を“借り”てかぶせる、という意味で、“めっき”のこと。二つの金属がまじるというので、転じて“いりまじる”“まじわる”意味になりました。音は、昔(セキ)が変化してサク。交錯、錯覚。

錠は、扉が開かないように、固定させるための“金具(かなぐ)”を表わした会意形声字です。これは、わが国で作り出した用法です。

錦は、“金糸銀糸を織り込んだ帛”のことで、金と帛との会意形声字です。“にしき”。「錦を衣(にしき)て(き)郷に還る」「錦を衣て夜行く」「錦上に花を添(そ)う」「錦を衣て絅(ケイ)を尚(くわ)う」。



石は、口が石の象形。これでは口(くち)と同じになるので厂(がけ)の部首を加えました。会意字です。音は積(セキ)、磧です。言葉の意味は、“ごろごろと積み重なっているもの”ということです。

碑は、石と牌との会意形声字。牌(ハイ)(hi)は低い意味の卑(ヒ)と、木の切れの意味の片との会意形声字で、“低い所に掲げられた小さな掲示板”が本義の字。位牌、骨牌。碑は、それが石でできたもの、“いしぶみ”。

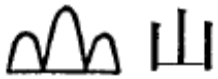
石碑、墓碑。

礎は、石と楚の形声字。楚（漢音はショ）は初と同音で、ここではその意味を借りて、家を建てる時の「初めの石」、“土台石”（いしずえ）を表わしたものです。「基」は、土台の土を堅めること。その上に置く石が「礎」です。基も礎も、共にしっかりとしないと、建物がしっかりしませんので「基礎」という熟語が生まれました。

磁は、石と兹（ジ）との会意形声字。兹は、草の“ますます茂る”意味の部首。鉄を吸いつける鉱石を、ふえる意味の兹と石とで表わしたものです。

滋は、草が水を得て、ますます“しげる”意味の会意形声字です。人の名では“しげる”。滋養、滋味。“うるおう”意味にも使います。

慈は、植物を育てる“やさしい心”を表わした字です。いつくしむこと。慈愛、慈悲、慈善。



山は、山の象形です。音はサン。呉音はセン。金剛山（コンゴウセン）、大山（ダイセン）。

峠は、山を上りつめて下る所、“とうげ”を表わした会意字です。わが国で作った漢字ですから、音はありません。

岐は、“山の尾根の分かれる所”を表わした字で、“分かれる”こと。支（シ）（支の項参照）と山の会意形声字。音は支（シ）が変化してキ。

峡は、山と夾（キョウ）との会意形声字。夾（キョウ）は、夾で、人が両わきに子供をかかえた形で、“はさむ”こと。“山と山にはさまれた所”が峡です。

挟は、“手ではさむ”こと。「鋏」は、金属で作った“はさみ”（わが国だけの使い方）。「頬」は、左右から顔面をはさんでいる“ほお（ほほ）”。「莢」は、豆をはさんでいる“豆がら”。弱い人を助けかかえてやる人が「侠」（客）です。

岳は、丘（おか）と山の会意字。丘はで、横に広くて、上の方が聳えていない形の“小山”です。岳は、丘の形の大きい山を言います。音は獄（ガク）。嶽は岳と同音同義の字。

崇は、山と宗との会意形声字。宗（宀の宗の項参照）は本家ですから、“本家の山”“一番高い山”のことで、転じて“気高い”という意味に使います。崇高、崇拝。

島は、鳥と山との会意形声字で、音は鳥（チョウ）の変化したトウ。海中、鳥の住む所の“しま”を表わしたものです。「嶋」とも書きます。

田は、整然と区画された“た”の象形です。中国で

は“た”も“はたけ”も田で表わしています。わが国では、田は「水田（スイデン）」で、稲を作る所。他の作物を作る“はたけ”は「畑」「畠」という字を作って、これを表わしました。

画は、田で、田の境界をはっきりさせる意味を表わした字です。“区切る”こと。区画、計画。転じて、“絵”。名画（メイガ）。

留は、卯（リュウ）と田の形声字で、“田んぼに止まって見張りする”ことを表わした字。今は、“とどまる”意味に用います。留学、留任。

畔は、“田を両方に分かつ、まん中の道”を表わした会意形声字です。“あぜ道”。転じて「湖畔」「河畔」（ほとり）。

界は、分ける意味の介（カイ）と田との会意形声字で、“田を分けるさかい”のことです。

邑は、古い形が邑で、囲みを表わす口と人との会意字です。中国では、聚落の大小を問わず、その周囲に城壁を築いて、野盗の襲撃から守りました。口はその城壁を表わしたものです。部首としては、邑が省略されて阝になりました。“村落”から、“都市”“州国”の意味に使われます。旁に使われて「大里」と呼ばれています。

邦は、阝と丰との形声字で、“くに”の意味の字です。小さいのを国、大きいのを邦とした時代もありましたが、今では同じように使います。友邦、連邦。

郊は、“邑と邑との交わる所”という意味の字で、一つの邑を出はずれて、次の邑に近い所を表わした字です。“町はずれ”。近郊。

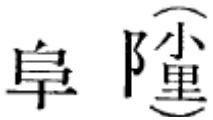
郡は、“邑の群”であり、またそれを統一する“君主のいる邑”でもあります。阝と君または群との会意形声字です。“多くの邑の集合体”。秦の始皇帝は、全国をいくつかの郡に分け、それぞれに王を派遣して治めさせました。これが郡県制度の始まりです。

郷は、郷（邑）と皂（キョウ）との形声字です。普通の邑を二つほど合わせたほど“大きい邑”という意味の字です。自分の住む邑を中心として付近の邑を含めた地域をさす名称です。近郷、故郷。

部は、解剖の意味の音と阝との会意字です。邑をいくつかに“切り分け”て、その分かれた小さな聚落が“部”です。部落。転じて、“区分け”の意味に使われ、「野球部、卓球部」「総務部、渉外部」などと使います。

郵は、辺境の意味の垂と阝との会意字で“辺境の宿場町”が本義で

す。転じて、“宿駅”は伝達を取り次ぐところから“文書を運ぶ”意味になりました。郵送、郵便。



阜は、 で、崖の地層の様子を象った字です。阝（）はその省略した形で、山のけわしい斜面、“がけ”の意味の部首です。「大里」とは形は全く同じですが、そのもとは全く異なっており、意味が違いますから、注意することが大切です。

防は、四方に人工の崖、つまり城壁を築いて、敵を“ふせぐ”ことです。阝と方との会意形声字です。中国の都市の構造をよく表わした字です。

院は、“完全な防壁”をめぐらした建物のことです。今では、“大きな建物”“りっぱな建物”という意味に使います。病院、学院。

陣は、軍（車の車の項参照）、帥（巾の帥および師の項参照）で説明したように、軍隊は兵車を中心にし、小高い丘に“じん”を立てました。阝と車の会意字です。“軍隊のそなえ”。

陥は、 で、崖のわきにある、落とし穴に人がおちたことを表わした会意字です。“おちいる”こと。陥落（カンラク）、陥没（カンボツ）。

陰は、阝と会（イン）との会意形声字。会は、今（キン）と云（雲の本字、雨の雲の頂参照）との形声字で、“曇って日光がよくささない”意味の字。陰は、“日当たり悪い北向きの崖”が本義の字です（第２章易の陽を参照）。山の北側が山陰、川では反対に南側が陰です。中国の古い都の洛陽は洛水という川の北側にあったので、この名が付けられたのです。

階は、阝と皆との形声字です。皆の比（人体の比の項参照）は人の並ぶ形なので、同じものが続く意味があります。階は、登るために“崖につけられた階段”が本義で、堂に上る段を言うようになりました。転じて、「階級」という使い方が生まれました。

陛は、阝と坐（ヘイ）との会意形声字。坐は、土の段々を並べて積む意味の字です。天子が天を祭るため、郊外に祭壇を作りますが、これに登る段が土の段、つまり陛なのです。天子を「陛下」と呼ぶのは、これから起こったものです。

隣は、鄰が本字。粦と邑との形声字で“となり村”が本義の字。邑の意味が失われたためか、これだけが小里扁になってしまいました。これでは、崖に関係のある字と誤られますので、やはり、もとの字に改めたいものです。